

新任若手教員の指導上の困難とその支援 －技能発達モデルの視点から－

所属校：足立区立東湊江小学校
氏名：中 郡 英 一
派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：技術習得モデル・看護論・リフレクション・コーチング

I 研究の目的

1 教師の資質向上を示唆

本研究は小学校における新任若手教員が指導していく上での悩みや問題を調査分析し教師の資質向上のためのきっかけを示唆するものである。ここで述べる新任若手教員とは1年目から3年目程度の教員を指す。

2 技術習得モデル

新任若手教員がどのように困難を解決することができたかを知ることで、スチュワート・ドレファスが提唱した技術習得モデル理論やこれを看護実践に応用したパトリシア・ベナーらの理論をもとに分析し、それがどのように解決し、また解決しえなかったかをさぐることで彼らが直面している問題と支援のあり方を考察していく。本研究における新任若手教員とは、「新人レベル」にあり、ドレファスのモデルでは「状況の局面」と呼び、具体的な状況に出会って学んだ理論などを適用しようと試みている段階である。看護の領域での「新人」の状態をベナーは「看護論」の中で以下のように述べている。

「新人レベルの看護師はかろうじて及第点の実務をこなすことができる。繰り返して発生する状態を察知するに足る十分な数の臨床状況に対処してきたか、あるいはそれを指導者に指摘されてきた看護師であり、状況の局面を理解するに足る十分な経験をもっている。」

この定義を教師の指導技術の発達段階に言い換えると、大学や教育実習、研修などで基本的な事柄を学んできた新任若手教員達は、授業中の子供の状況や生活指導上における問題を自分なりに解決できる段階にある。しかし、彼らには、個々の状況での複雑な判断と行動が求められるのであって、彼らに求められる要求

の多くは彼らの能力を超えている。そのために、彼らは上位のレベルにいるベテランから見れば、未熟とも言える判断や行動が目につくことになる。

3 新任若手教員を取り巻く環境

団塊の世代の大量退職のために、採用人数が急増している。その一方で理不尽な要求をする保護者などに代表されるように学校を取り巻く環境が過酷となっている。新任教員に対して未熟さを許容する環境にない。

4 新任若手教員を支援する研修

必ずしも有効に機能しているといえない状況にある。ある教員の「学校での具体的事例をもとに話を聞いたので明日の授業に役立つ。」という意見がある一方で「初任者研修は形式的で具体性に欠ける。」という意見もある。こうした意見や感想があがってくる背景には指導する教員と指導を受ける教員との間に、望んでいられる助言に対して望ましい支援がなされていないのではないかと推測できる。ある指導教員が「こちらがよかれと思って言ったことを受け入れてもらえない。」と述べていることから言うことができる。

こうしたことをふまえて、本研究では質問紙とインタビューを用いて彼らの困難の特徴やどのように取り組んでいるのかを調査し、今後の支援の資料とすることにある。

II 研究の方法

A区の1年目から3年目までの教員103名に対してアンケートによる調査を行った。その結果を分析し、言えることをまとめた。調査の方法は質問紙及び記述式による。

Ⅲ 研究の結果

調査の結果以下のようになった。

1 学習指導面における困難な領域

- 1位 国語科作文指導 57%
- 2位 算数科考え方指導 51%
- 3位 国語科読解指導 49%

2 生活指導面における困難な領域

- 1位 喧嘩の仲裁 59%
- 2位 いじめの解決法 26%
- 3位 清掃指導 26%

3 学習指導上の困難な原因

- ・経験不足
- ・教材研究の甘さ
- ・準備不足
- ・知識不足
- ・自分が未熟
- ・見通しのなさ
- ・自分が不得意

4 生活指導での困難の原因

- ・指導力不足
- ・経験不足
- ・家庭の躰が原因
- ・学校と家庭との常識の差異

Ⅳ 考察

1 彼らが「望んだ支援」とその実際

彼らの困難と問題点を、一人前レベルから見たら幼稚に思えたり、非常識に思えたりする行為を私たちは、信じられないという思いで見られることが少なくない。しかし、新人レベルという段階は、そのようなレベルなのだという認識と理解が必要なのだ、というのが、本研究で依拠する「技能の発達」モデルの提唱するところである。繰り返すように、「初心者や新人レベルでは状況を把握することがほとんどできない。彼らにとって、直面する状況はあまりに不慣れで、未知で、しかも教わった規則を思い出すことに集中しなければならない」(ベナー)^①からである。また、彼らが求める支援も、個々の状況に応じた、より具体的な助言を望んでいたと言える。それぞれ望んだ支援は以下の通りである。

学習指導面

- (a)先輩の授業を見せて欲しかった。
- (b)TT などのように一緒に指導してくれる先生がいたらよかった。
- (c)実技研修などを校内で実施して欲しい。
- (d)個別にいつでも相談できる専門機関があるとよかった。
- (e)専門家や専科の先生の話聞くなど、授業を見せていただく機会もない。
- (f)多くの実践事例があればいいと思う。

生活指導面

- (a)学級の実態を知った上で、クラス全体が意識して取り組める程度のルールを設定する仕方を知りたい。
- (b)子供を叱るだけではない落ち着かせ方を他の教員や専門機関の方と相談すること。
- (c)「こんな時どうしたらいいか」を先輩の先生方に教えて欲しい。
- (d)喧嘩への関わり方がこれでよかったのかと後からでも相談に乗れる環境。
- (e)先輩方の指導法をもっと見学できるようなシステム、時間
- (f)具体的な子供への言葉かけを知りたい。

学習指導面での記述の中で特に目立ったのは(a)の先輩の授業見学であった。身近にいる先輩の授業を実際に見て学びたいと考えている新人レベル教師が多く、先輩の技を盗んで自分にも生かそうと思っていることがわかる。しかし現実には日々の業務に追われていたり、自分の授業があつたりするために、この望みがかなわないことがほとんどである。(e)の意見がこのことを如実に表している。(c)の「実技研修などを実施して欲しい。」は自分が不安に感じる指導方法を改善しようと思うが故に様々な指導場面を研修したいと思うのである。これは業務の効率化を図ることができれば、実現可能な支援の在り方であるが、現実には様々な業務に追われ難いのも事実である。(d)や(e)のような専門家に話を聞く機会というのは、生活指導全体会や校内研究会において可能であるが、タイムリーなものではない。

生活指導面でも学習指導面と同様に(c)や(e)のように、先輩を頼りにしたいと願っている記述がある。身近な存在である先輩にこそ頼りたいと願っている。また生活指導面においては様々な状況下で瞬時的な判断力が求められるために、(f)のような具体的な言葉かけを知りたいと考えていると言える。

これらのことから言えることは具体的な場面に応じた具体的な助言を望んでいることがわかる。自分が直面している問題に応じた支援があればすぐに対応できるし、翌日からの授業に生かすことができる。これらの問題を解決しようと、新人レベルにある教師に対する支援策を講じている例もある。

以上のように新任若手教員は一般論ではなく状況の局面に応じた具体的な解決策、方法を知りたいと願っていることがわかる。

① ベナー 「ベナー看護論」 医学書院 2008年